

# 文化情報発信システムとしてのインターネット博物館

—大学・地域博物館の連携を中心にして—

佐野賢治

SANO Kenji

(事業推進担当者)

## はじめに

神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」では、その成果を後半2年間、①地域統合情報発信班、②実験展示班を新たに編成して公開方法を検討、実施することになった。本プログラムでは非文字資料として、図像・身体技法（民具）・景観を三本の柱として調査研究を行ってきたが、①のグループではこれら、非文字資料を福島県南会津郡只見町という一地域において、総合・統合化して発信するシステムを開発する。

その理由は何よりも、町当局・住民の本プログラムに対する理解にあるが、15年間に及ぶ町史編さん事業が終了し、各種文書・民具・写真をはじめ映像資料・地質、動植物などの自然誌資料などの所在・分布などが網羅的に記録化・整理され、それらの関係性は16巻の町史本編・文化財調査報告書などを参照することにより意味づけられる。中でも、学界で只見方式と呼ばれるようにまでなった民具を制作・使用した住民自らが整理・記録化した8千点余の民具資料は現物が収蔵、カード化され、その内の、「会津只見の生産用具と仕事着コレクション」2,333点は国の有形民俗文化財に指定されている。また、大工・屋根葺き・鉄砲打ち（猟師）・伯楽（馬の医者）から、結婚式・葬式などを差配する小笠原流のユルシトリ、剣術をはじめとする芸道の免許状まで、その職の由緒書、認可状ともいえる職人巻物が600点余と、全国的に見て当町に集中的に分布しており、職人研究の貴重な資料群となっている。

これらの文書をはじめ写真・映像資料は只見町教育委員会に、民具は旧朝日公民館に収蔵されているが、町内には川の自然環境や民俗を展示した川のものしり館、会津只見考古館、河井継之助記念館、山塩資料館など考古・民俗・歴史関係の資料館がすでに開館しており、現在、川のものしり館にブナ林を中核とした展示構想も進められている。

一方、COEプログラムの一拠点、神奈川大学日本常民文化研究所は、その所蔵資料を公開展示する場として、常民参考室を2002年に開室し、過去に、「絵巻物から辞書をつくる－日本常民生活絵引の世界－」（2002年度）、「ぬいもの・つくろいもの－暮らしの中の知恵とわざ－」（2003年度）、「鍛造の世界－鉄をきたえ意志をふきこむ－」（2004年度）、「映像でつづる昭和初期の日本－渋沢フィルムの世界－」（2005年度）の公開展示を行ってきた。2005年度展示では同時に、第一回COE国際シンポジウムおよびプレシンポジウムと連携し、「浮世絵における常識と非常識－複製版でみる“名所江戸百景”」の企画展示を試み、浮世絵版画の摺りの実演は好評を博した。なお、常民参考室のある神奈

川大学3号館には恐竜の3D映像解説を主としたバーチャル地球史博物館も開設されている。

本小論では、大学における博物館の意味を学芸員養成課程も含めて考え、さらに地域博物館との連携方法とその意味を探り、文化情報発信の一つの方向性を探りたいと考える。

## I 大学の学術研究とユニバーシティ・ミュージアム

大学における学術研究活動により収集・生成された学術標本は、学術研究と高等教育に資する資源であり、我が国では1994年6月1日現在、動植物、古生物、鉱物、考古学資料を中心に約2,500万点の資料が収蔵され、そのうちの約1,500万点弱が整理されている。しかし、国際的に評価の高い欧米の多くの大学に設置されているユニバーシティ・ミュージアムが研究・教育はもとより、学術情報の発信・受信基地として、学内・外で大きな機能を果たしている現状に比べると大きく立ち遅れている。学術審議会学術資料部会では、この現状に対し、大学博物館の機能を、(1) 収集・整理・保存 (2) 情報提供 (3) 公開・展示 (4) 研究 (5) 教育 としその設置を求め、さらに大学全体を地域社会に開かれた知的・文化的情報の発信拠点とする考えを強調し、展示や講演会などを通じ新たな知見を積極的に提供していく管理・運営方法の工夫を求めている<sup>(1)</sup>。

このような大学博物館をめぐる現状の中で、本プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」では、その教育プログラムとして、高度専門職学芸員、仮称シニア・キュレーターの養成制度の開発を一課題として取り上げ、研究拠点の一つである大学院歴史民俗資料学研究科では初年度2003年から博物館資料学の専攻分野を開設した。しかし、その養成目的と実質的なカリキュラムの内容は試行・模索中といえる。

一方、日本常民文化研究所は、水産史料、渋沢フィルムなど膨大な資料を所蔵し、その展示施設として横浜キャンパス3号館1階に常民参考室を有し、先述したように所員の研究を反映した展示実績を重ねている。また、同じ建物内には最新のVHF (Visual Effects) を駆使したバーチャル地球史博物館もあり、巨大恐竜のリアルな動きには目を見晴らさせられる。また、学部生を主対象とするが学芸員課程が歴史民俗資料学研究科のスタッフを中心に、日本常民文化研究所の資料及び施設利用によって運営されている。

以上が、神奈川大学における博物館に関係する活動の現況である。今後これらを有機的に連携させると共に、シニア・キュレーター養成のシステムを作り上げなければならない。そのための一環として、2005年9月に訪れたアメリカのユニバーシティ・ミュージアムの現状と博物館学コース、そこでのカリキュラムの実際を、カンザス大学とハーバード大学の例で紹介する。2例ではあるが、現在活況を呈している講座であり、学芸員養成に関しても民間主導であるアメリカ型の参考事例となる。対照的に学芸員の養成など博物館も含む文化政策において国家主導のフランス型、またその折衷タイプについては別の機会に取り上げてみたい<sup>(2)</sup>。

### 事例1：カンザス大学—調査研究と博物館学の結合—

神奈川大学と姉妹校提携をしているカンザス大学は爬虫類・両生類のコレクションで全米に知られる自然史博物館の他、スペンサー美術館、人類学博物館 (休館中)、ワトソン図書館・スペンサー研

究図書館の2館の図書館を有する。自然史博物館のコースディレクター、John E. Simmons氏よりの説明を以下に記す<sup>(3)</sup>(写真1・2)。



写真1 (左) キャンパスの中心部に建つ自然史博物館の威容



写真2 (右) 専門の爬虫類コレクションを説明するJ. シモンス氏

カンザス大学自然史博物館には9人の学芸員がいて、みな生物学部に所属し、博士号を持っている。研究と大学院生の指導が主な仕事であり、博物館の展示には直接かかわらない。大学の付属博物館・美術館には学芸員とともに、コレクション・マネージャー (collection manager) と呼ばれるスタッフがおり、収蔵品の管理、調整、保存にあたっている。スペンサー美術館では1名のコレクション・マネージャーが2万8千点にのぼる収蔵品の管理に当たっているのに対し、自然史博物館には9名のコレクション・マネージャーがおり、450万点の資料を管理している。私はそのうちの一人であり、30万点にのぼる爬虫類、両生類の管理をしている。つまり、スペンサー美術館のコレクション・マネージャーの10倍以上の資料を一人で管理している。しかし美術館と違い、展覧会を主催し、収蔵品の展示をするわけではなく、収蔵資料に関しては、研究調査のために他の大学や博物館に標本を貸し出すことなどを行っている。

私は、生物学で学士号を、博物館学で修士号を取得しており、カンザス大学博物館学課程の卒業生でもある。アメリカの大学では、博物館学のみを教えるコースもあれば、歴史学や文化人類学などのコースの中に博物館学を開講しているものまで、さまざまな形で博物館学コースが開設されている。そのような現状の中で、カンザス大学博物館学コースは2年間の修士課程コースであり、博物館学のクラスと専門のクラス(人類学、歴史学、美学、アメリカ学など)がバランスよく履修できるプログラムとなっている。専攻学生たちは、博物館学のクラスを18単位、専門のクラスを18単位履修する(1クラスは3単位)。また、インターンシップとして6単位履修する。インターンシップ、博物館実習は500時間以上となっている。卒業するには計42単位が必要である。博物館課程は、セメスターシステムを取り入れており、フルタイムの専攻学生は1セメスターに4クラス、計12単位を履修する。全米で開設されている博物館学課程の必要単位数は平均34単位といわれ修士課程としてはかなりハードな単位数であり、修了までに時間がかかる。また、カンザス大学では修了論文を求めず、インターンシップをその代替と考え、500時間の実習が終わった時点でレポートの提出を求めている。

カンザス大学博物館学課程は1981年に開設され、これまでに135名の修了者がおり、博物館・美術館はじめ画廊などへの就職率は80%を越えている。この数字は誇りうるものである。コースは、6つのコアコースからなり、これらは必須科目となっている。他の大学では、専門クラスを先に履修させ、その後に博物館学クラスを履修させるところがあるが、カンザス大学の博物館学課程では学生の専門が何であれ、まず社会における博物館の役割について学ぶことが大事と考え、入学後すぐに以下のコアコースを履修させる。

1. 博物館運営法      *Museum Management*
2. 博物館の本質      *The Nature of Museum*
3. 博物館展示入門    *Introduction to Museum Exhibits*
4. 博物館収蔵品管理の原則と実践  
*Principles and Practices of Museum Collection Management*
5. 博物館教育入門    *Introduction to Museum Public Education*
6. 保存の原則と実践   *Conservation Principles and Practices*

日本では学芸員養成課程を設置するには文部科学省の認可が必要と聞いているが、アメリカでは連邦政府による認可制度も統一的な設置基準もない。大学によって養成基準も違い、比較することは難しいが、非常にレベルの高い大学もあれば、低い大学もある。公式的にも、非公式にも基準がないためにどのプログラムが優れているのかを見極めるのは難しい。大学における博物館学課程を充実発展させるためには、カリキュラムの基準を整える必要性を私は、関係者に喚起している。

アメリカでは学芸員は国家資格ではないが、博物館により一定の教育水準が求められている。大学の付属博物館では学芸員は大学の研究員とみなされ、通常では博士号の取得が求められる。一般の博物館では、博物館学の修士号を取得していたり、学部でいくつかの博物館学のクラスを履修している場合から、何の学術的トレーニングを受けていない学芸員までさまざまである。これは博物館の予算や使命、規模などに起因する。カンザス大学のあるローレンス市のダグラス郡歴史博物館の学芸員は、カンザス大学の博物館学課程修了者で、館にとっては初めての修士号取得者である。仕事は、収蔵資料の保存・管理と展示であるが、研究はその使命には含まれていない。

アメリカでは、現在、博物館学の博士課程を設置している大学はない。学芸員たちの博士号は、博物館学ではなくその他の専門分野、生物学や歴史学、文化人類学などで取得したものである。カンザス大学博物館学課程では、現在、博士課程の設置を考えている。修士課程と博士課程の大きな違いは、修士課程が、博物館の運営や所蔵品の保存、展示に関する教育に重点を置くのに対し、博士課程の目的は、調査研究と理論の確立を目指すことである。博物館学課程は、博士課程がないために理論性が欠落しているという弱点を抱えている。

最近、私は所蔵品のデータ化の問題について、南米コロンビアでコロンビア人の仲間とスペイン語で一週間に及ぶワークショップを行い成功した。タイでも、英語で行い成功した。データ化について他の言語と文化に適用できるかどうか検討しているところである。



事例2：ハーバード大学—エクステンション・スクール（公開講座）方式—

ハーバード大学の博物館学講座は、公開講座（Extension School）の一部として運営されているが、ハーバード大学の正式な修士号を授与する、独立した学部として位置づけられている。講座の管理運営については、他の学部と同じように、人文科学学部の教授会に報告書を提出しなければならないし、新しいコース等を設置する場合は、教授会の承認と許可を得る必要がある。ハーバード大学公開講座の瀟洒な建物の博物館学コースのアシスタント・ディレクターであり、コースの世話役を勤めるMs Linda Newberry氏より説明を受ける<sup>(4)</sup>（写真3・4・5）。



写真3（左上）博物館学講座のあるエクステンション・スクールの建物



写真4（右上）ハーバード大学の全景写真を前にしてL.ニューベリー氏（中央）と



写真5（右下）自然史博物館のガラス細工で作られた植物標本のコレクション

このコースの目的は博物館で働くために必要とする理論・方法論・実践的知識を提供することで、博物館の事務スタッフや調査員として博物館で働く上で必要となる調査方法やカタログなどの執筆に関する能力を高めることにある。

入学資格としては、学士相当の学歴を有すること、英語を母語としない学習者についてはTOEFLの一定以上の成績が求められる。卒業までのプロセスは次のとおりで5年以内に、博物館実習、修士論文を含め10コース（1コースにつき4単位）を履修して修了しなければならない。

**必修科目Core Courses 3コース 12単位**

1. 博物館学入門 Introduction to Museum Studies
2. 調査法と論文の書き方 Research Method and Scholarly Writing

学生の多くは大学教育を受けてから時間が経っているため、学術的な論文執筆に必要な知

識・技術を再度身に付ける必要がある。社会人の受講生は転職に備えこのコースを熱心に受講している。

### 3. 博物館運営法 *Museum Management*

博物館を運営していく上で必要となる財政面の基本的知識を教示する。

#### **選択科目 *Museum Studies Electives*** から原則的には 3 コース 12 単位を選択。

1. 博物館展示 *Museum Exhibition*
2. 収蔵と管理 *Collections and Curation*
3. 博物館教育 *Museum Education*
4. 収蔵品の保存と保守 *Preservation and Conservation of Museum Collections*
5. 博物館と情報公開 *Museum and the Web*
6. 歴史的建築博物館 *The Historic House Museum*
7. 博物館の歴史的役割 *The Role of Museums in History*

#### **一般科目 *General Electives*** から原則的には 2 コース 8 単位を選択

1. 人類学博物館 *Anthropology Museums*
2. 芸術博物館 *Art Museums*
3. 歴史博物館 *History Museums*
4. 自然史博物館 *Natural History Museum*
5. 博物館経営 *Museum Administration*
6. 技術と実務 *Technical/Practical*

ただし、美術・美術史、生物学、歴史などを学部で専攻し、既に専門的な知識を身につけている学生は、2 コースを一般科目から選択するのではなく、規定の 5 コースすべてを選択科目から選択する場合もある。このようなコース選択ができるので、博物館が受講生を職員として採用する上で候補者として有利である。

#### **博物館実習 *Internship* 4 単位**

受講生たちは 200 時間以上のインターンシップを求められている。実際に受講生たちの実習の時間は博物館が必要としている仕事や時間と、学生のスケジュールに合わせて柔軟に対応している。インターンシップ先はハーバード大学のキャンパス内にある博物館・美術館だけでなく、どこの博物館で行っても良いことになっており、インターンシップ先の選択は受講生個人にまかされている。博物館には規模の大きなところ、小さなところさまざまあるが、小さな博物館でインターンシップを行う利点は、直接コレクションに接することができる、大きな博物館では関わるできないようなことを経験することができる点にある。例えば、小学校の遠足で来た生徒たちへの講義を任されたり、展示カタログ作成に参加できたりする。必修/選択科目（選択・一般科目）の中から 5 コースを受講して初めてインターンシップを始めることができる。インターン先が決まると、受講生は 4 単位分の学費を大学に納め、インターンシップを始める。受講生の中には博物館で働いた経験のあるものもいる

が、インターンシップはそれまでとは違う環境で行うように勧めている。

#### 修了論文Master's thesis or project 4単位

受講生は指導教官との相談の上、研究計画を提出し、承認を得る。

論文は①調査に基づくもの ②企画に基づくもの の2つに大別できる。

博物館学コースは免状取得課程Certificate Programから修士課程Master Programに2003年移行したばかりで、2004年度の卒業生は1名、2005年現在118名が在籍中で、そのうち17名が修了論文に取り組んでいる。受講生は年長者が多く、教員、図書館司書などさまざまな職業についているが、博物館で働いた経験を持つ人は少なく、博物館に転職を希望してこのコースをとっている。修了生の進路、就職率はMaster Programとしてはまだ日が浅いため、統計は出せないが、Certificate Programの頃は修了生へのアンケート結果によれば、最も有効回答数が多かった年度で63%ほどである。近年多くの博物館が修士号を持っている人を採用するようになってきているので、ハーバード大学でもCertificate ProgramからMaster Programへと移行した。授業料は、授業形態や規模によって異なるが、1科目おおよそ17万円(\$1,450~1,525)かかる。Extension Schoolの教授陣はハーバード大学の教員やボストン地区の博物館研究員が多くを占めるが、全員1年契約のインストラクターであるため、毎年同じ教授が教えるとは限らない。自分のクラスで使う教科書は、教授陣が独自に選んだり、関係論文を編集して簡易製本したりしている。生協で販売しているが、受講生は中古本など買い求め、少しでも学費の軽減につとめている。

これまでのところ、博物館学のコースを設置している大学間で協議会などはつくられていないが、受講生たちにはアメリカ博物館協議会American Association of Museumsとニューイングランド博物館協会New England Museum Associationの両方に入会し、活動するようにと勧めている。

博物館実習における謝金として、インターンシップのアドバイザーもしくは博物館に対し\$500(日本円約5万5千円相当)が、受講生が大学に納入した授業料から支払われる。また、修了論文の指導教授には、\$1,000が支払われる。

ハーバード大学のホームページでは授業のシラバスや履修届などを見ることができる。

[www.extension.harvard.edu/museum](http://www.extension.harvard.edu/museum)

以上、アメリカの2大学の事例を博物館学課程のカリキュラムを中心に紹介した。2大学とも、歴史あるユニバーシティ・ミュージアムを有している。ハーバード大学のピーボディ・ミュージアム(Peabody Museum of Archaeology and Ethnology of Harvard University)などは、このプログラムにとって必ず言及したい博物館であるが、ここでは、その運営や展示などについては多くのガイドブックもあるのでふれない。しかし、博物館講座の内容をみると、どのような学芸員を養成しようとしているかがカリキュラム上からうかがえ、逆に博物館の果たす社会的役割の期待がそこから読み取れる。日本の学芸員養成課程のカリキュラムに比べ、インターンシップ(博物館実習)に圧倒的な時間が割かれているなど実社会での実務経験が重視されていることがわかるのである。<sup>(5)</sup> 実際、カンザス大学の博物館講座のインターンシップの館務実習を、カンザス大学構内のスパンサー美術館とカン



ザス大学があるローレンス市のダグラス・カウンティ歴史博物館で参観した。展示企画から、子供の体験学習まで実習生は実に生き生きと立ち働いていた（写真6・7）。

蛇足ながら、旧銀行の建物を利用したダグラス・カウンティ歴史博物館は、1888年建造の建物自体が文化財となっているが、屋根裏を収蔵展示の空間として巧みに使っていた。アーリー・アメリカンのウェディングドレスのコレクションが館の自慢で、その展示を企画したと実習生は言っていた。渋沢敬三がイギリスでヒントを得たとされる、アチック・ミュージアム（屋根裏博物館）もこのようなものであったのだろうか（写真8・9）。



写真6（左上）重厚な外観のカンザス大学スペンサー美術館

写真7（右上）子ども達の体験学習を手伝う実習生

写真8（左下）旧銀行の建物を利用した歴史博物館

写真9（右下）屋根裏の梁に頭をぶつけないよう注意をうながす！

## II 地域社会と博物館—文化情報の資源化と発信—

非文字資料が文字資料の対語とするとその範囲はきわめて広い。文字を持たない、または文字があっても文字になじみのない無文字社会として、原始社会・未開社会・民俗社会が指定され、かつてはそれぞれ考古学・民族学・民俗学が研究の対象とした。その対照に、文字により記録された資料を扱う歴史学がおかれ、遺文・遺物・遺習という対象とする資料の性格により歴史・考古・民俗学と学問



も分化した。しかし、地域社会において人間の生活は当然のことながらこれら学問的便宜や範疇の中ではなく、日々生きていくために全体・総合的、ホーリスティックwholisticに営まれ、その集積の結果として眼前に表れているわけである。それゆえに、生活の中での有形・無形、文字・非文字などあらゆる資料はその形態や性格ではなく、そこにこめられた情報を読み取り、情報同士を組み合わせることにより新たな意味を見出すための素材と考える必要がある。英語の表現を借りれば情報の質的転換、information→intelligenceの流れになる。

## 1 市町村誌編さんとデジタル・アーカイブ化

平成の市町村合併が一段落したが、今後これを期した市町村誌作りの企画が予想される。今回の市町村合併で失われた市町村名は多いが、その一方、合併で旧郡の名が各地で復活したのも特筆される。突飛な命名もまた注目を浴びた。地形名に多く由来する地名や姓名もまた貴重な文化財である。

ところで、市町村誌編さんはそれ自体が目的化され、史誌の刊行をもって事業が終了するのが常である。地域社会の将来を考える際の判断材料を有志に提供するのが郷土誌編さん者の心構えだと説いた柳田國男のよく知られた一文、「箇々の郷土が如何にして今日有るを致したか、又如何なる拘束と進路を持ち如何なる条件の上に存立して居るかを明かにし、其志ある者をして此材料に基いて、どうすれば今後村が幸福に存続して行かれるかを覚らしむる」ものでなければならぬとの主張からは、はるか遠いところにあるといえる。<sup>(6)</sup> 編さん事業で集められた史・資料は全国的に見れば膨大なものとなる。しかし、今日ではIT技術の進展により、容量の大きい記憶メディアに収め、データ化が可能になった。柳田の言に従えば、次にこれらの資料の活用、intelligence化を図らなければならないことになる。

只見町史編さんでは、本編11巻の刊行ほか、民具・自然・昔話・電源開発・方言編など5巻の資料編を作り、カラー写真や図録を多用し、読み物風にするなど図鑑や自然探索のガイドブックとして利用できるように工夫し、記録性とともに関心が意図された。会津若松市史では刊本だけではなく、江戸期の鶴ヶ城を再現したグラフィック映像などを収めたビデオ版8巻、CD-ROM版2巻とともにビジュアル版市史25巻の発行を1999年から始めている。市町村史が行政サイドや研究者を対象に刊行されるのではなく、住民サイドの視点に立った編集がなされてきた。と同時に、活字離れも一因とは考えられるが、文字媒体ではなく、新たな非文字媒体を使った情報informationの提供といえる。

地域社会、ムラにおける文字資料は昔も今も、圧倒的に行政関係資料が多い。その一方普通の人々の暮らしは一度文字化され民俗誌として資料化された。しかし、近年では音声や映像もそのままデジタル化できるようになり、文字資料による公的記録と非文字資料による私的な記録・記憶が結びつき、総合的な市町村誌編さんの可能性が広がった。個人撮影の写真、ビデオ映像だけでみても途方もない数量となる。災害誌など、史料と人々の記憶、土地に刻まれた痕跡などの組み合わせによって立体的に把握でき、過去の記録としてだけではなく、将来にわたる災害予知の判断材料ともなっている。市町村誌編さんによってデジタル化した情報群をいかに活用していくのかが、地方の行政団体をはじめ、住民の有志に問われ、その情報の扱い方を考えていかなければならない段階となった。膨大な市町村誌編さん資料を有効に活用できるシステムを開発できれば、地域の将来、振興策に多大な判断材料を提供できることになる。

## 2 地域社会とインターネット博物館

実際、只見町では町史を「町の文化財目録」と位置づけ、マチおこし、観光案内、生涯学習、総合的な学習に積極的に利用している<sup>(7)</sup>。いわば、町史の目次や索引は、地域のさまざまな事項を知るための検索エンジンにあたるといえる。今後、町史の内容を展開しながらデジタルデータ化が図られ、より活用しやすいシステムとなっていくことが期待される。

只見町の町史編さんは、住民参加型であったから、それぞれの資料の背景には情報提供者 informantとの関係がある。各資料には、氷山の海面下のようにさまざまな情報が蔵されている。例えば、ある民具の使用法を知るために、民具記録カード一つを手にとっても、形態や材質の記載、また計測値や注記から読み取れる情報だけではなく、さらに使用した本人に直接話しを聞いたり、実演してもらえば、使い勝手や使い方のコツ、カンなど文字化や映像化できない部分を補うことができる。さらに、インターネットの利用は、個人情報保護には細心の注意を払わなければならないが、双方向で質疑応答ができるため、文化情報の活用には非常に有効である。高齢者がパソコンの扱いに不慣れでも、孫に操作の手助けをしてもらうなど、家族関係を強める効果も生む。画像はインターネットで、世界中に発信されると聞いて、それを励みに民具製作にさらに力を入れ、取り組む老人もいる。

ここで、図像・身体技法（民具）・景観という非文字資料情報を只見町という地域で、如何に統合して発信するかの課題に対し、民具を中核にすえて具体的に考えてみる。会津地方には著者、年代、対象地が明確な農書として日本最古の『会津農書』（貞享元年・1684）が残る。その内容を農民に普及させるため絵農書、歌農書も作られた。一方、只見町には、貞享2年（1685）の『会津郡伊北和泉組風俗帳』が残り、当時の年中行事や農作業の様子が記されている。これらの史料や図像に加え、その製作技法や使用に伝統が残る農具や野良着を使って、かつての農法を復元することは今ならできる。もっとも、農耕馬の調達など多少の困難さは伴うところもある。近代における乾田馬耕の導入、戦後の構造改善と農業の機械化など農法の大きな変化と、田圃の景観、農作業における身のこなし、年中行事の変遷との関係などが画像処理により通時的に再現できる。

その画像も、スーパー・ハイビジョン、高精細解析度をともなったデジタル・コンテンツ化することにより、ズームアップ・ダウン操作で、鳥瞰的構図から微細な観察まで、従来では及びもつかない視角・視点からの発見が期待できる。絵図・地図と実際の風景をクロスさせ、景観の通時の変化を追うことや、農作業における身体の動きの特徴がモーション・キャプチャーに連動させることで分析できる。只見町では、戦後の電源開発、毎年のように襲う伊南川の洪水、圃場整理事業などにより集落、耕地の景観が大きく変わったが、それに伴う生産・生活の変化を项目的に入力し、GIS（地理情報システム）なども援用し、相互関係が立体的に理解できるような画面構成を試みる。

只見町では、民具の実物約8千点余は旧朝日公民館に収蔵展示されている。このたびのCOEプログラムでは、記録カードは写真付きでデジタル入力し、全てとはいかないまでも地域的に特徴のある民具についてはその製作や使用の実態を動態画像化し、いずれもデジタル・コンテンツ化し、拡大縮小も自在に操作できるようにする。また、製作者や使用者に質問を書き込み、回答もできる工夫もする。さらに、それぞれの民具の分布、呼称の一般的情報から、研究文献などの検索ができるクリック・ポイントを設け、関係する国内・外の博物館などリンク先も整える。このように、インターネットを利用することによりさまざまな試みが可能となる。

従来の箱物としての博物館施設は、実物資料の収蔵と展示、講演会など人の集まる空間としての意味が第一となり、情報の集約と発信という点においてはインターネット博物館の方が可能性を持つことになる。それぞれの家庭や職場にある小さな函、パソコンがインターネット博物館となり、地域を越えて、国内・外を相互に結ぶことによって大きな博“情”館となる。<sup>(8)</sup>

### 3 文化の伝達と継承—博物館と学校の連携—

非文字資料は民俗学が対象とする、“民間伝承”と一面では重なる。民間伝承の性格・内容をめぐってはさまざまな説が行われたが、柳田國男は、目で見ることができる衣食住など有形文化、耳で聞ける昔話・伝説など言語芸術、心で共感する共同幻想など心意現象とその対象を大きく三分類した。伝承の語についても論議が行われてきたが、ここではもっとも単純に、“伝承”を、空間・横軸での文化の伝達と、時間・縦軸での文化の継承の合成語と考えると、情報化社会の今日、伝達は瞬時に地域を越えるのに対し、上位世代から下位世代への文化の継承ラインは細くなっている。また、父親が息子にパソコンの扱いを教えてもらうなど、継承ラインの逆転現象も見られる。

かつては民俗・民間伝承の場として家や村、地域の共同体が機能した。しかし、産業構造の変化や少子高齢化の影響など地域社会においても、文化の継承のラインは年々細くなっている。地域においては、地域住民にとっての母校であり、同窓という縦軸ラインが生きている学校が、今日その場として代替機能を果たせるのではないかと指摘したことがあった。<sup>(9)</sup> 加えて、地域の博物館はその有力な場になりうる。実際、小・中学校の空き教室が郷土資料室になっている例は、昔も今もあり、その展示・収蔵品はそれぞれの時代性を反映している。

只見町では、民具を製作し、使用した経験のある古老自らが、孫に語り聞かせるつもりでその整理・記録化を行った。<sup>(10)</sup> “民具”は、人と道具の合成語である。同じ物を扱うにしても、考古学が遺物から情報を得るのに対し、民具の場合、物からだけでなく生きている人からの情報が多く得られる。

インターネット博物館では情報のやり取りは可能だが、実際の人や物とのふれあいはない。そこで、地域の博物館は人から人への文化の伝承の場になる。只見町では、民具整理をした古老たちが「民具と語る会」を1998年発足させ、町の文化祭などで民具展示を行うなど継続的な活動を行うとともに、学校に貸し出す民具の基本セットを用意し、総合的な学習の時間での説明などの折に役立てている。民具を語るのではなく、民具と語る、この言葉にこの会の考えが集約されている。会員たちは自らが情報提供者informantであり、資料を整理し、解説もする学芸員である。

地域社会の博物館は、地域の過去と未来をつなぐ現在の拠点として、住民自らが集い文化を伝承し、展望する場であることが要請される。そして、学芸員の仕事の主役は住民自身が果たしていくことになる。また、地域の博物館をこのような視点から考えると、学校教育、行政当局との連携が強く求められるのである。<sup>(11)</sup>

### おわりに—知識と知恵の結合—

世界でも有数の多雪地である只見地域は、雪で浸食された雪食地形（アバランチ・シュート、グラインド地形、筋状地形）という他の地域では見られない景観を呈し、多雪に適応した植生、原生的なブ



ナ林，多種多様な生物が生息している．地質学・雪氷学・林学・生態学・動植物学者の来訪も多い．この豊かな自然を守ろうと，ブナ林を中核にした，世界自然遺産登録運動に住民は現在取り組んでいる．

一方，山先（鉄砲打ち），元山（木こり）の人々の間には，山の自然に対するさまざまな伝承が残されてきた．鉄砲打ちが集団で猟をすることを「イクサガケ」（戦駆け）というが，この言葉は，熊を獲るという狩猟が，熊に集約される自然との対決であるということを端的に言い表している（本来は，イクサ＝祭り紙を山の神の木に供える意だという）．猟の成功は，熊の生態はもとより，山の地形，雪の性質，風向き，前年のブナの実の成り具合など瞬時に総合判断し，人が熊との知恵比べに勝ったということになる．しかし，山先が出猟時持つ巻物『山立根元巻』にナデ（雪崩）除けの呪文が数多く記され，人事を尽くしても叶わない事象に対しては山の神に祈ったことがわかる．そもそも伝統的な猟は狩猟儀礼であり，獲物は，山の神への祈りが通じ，山の神から人に遣わされる山の幸と考えられてきた．大学で学ぶ，生態学や動物学の知識だけでは熊は獲れないのである．

近代的合理精神による科学知識，伝統的な経験則による生活の知恵，この対照的な二つの知のあり方は，大学とムラに代表される場でその機能を発揮してきた．頭で考える知識は体を使う実体験を経て，はじめて知恵として身に着く．大学と地域社会の知のあり方，その集約と発信の場としての博物館のあり方を理念的な問題も含めて比較対照してみた．大学の博物館が資料を研究素材として分析材料として扱う傾向に対し，地域の博物館資料はその総合化に意味を持つことなどが指摘できた．

そして，この二つの知をつなぐシステムとしてインターネット博物館を提示してみた．インターネット博物館はその一面はバーチャルな世界であり，現実や実物には及ばない面があるが，そこに込められた情報をクロスさせることによって，新たなものの見方や価値が生み出される可能性を秘めている．

また，インターネット博物館での情報の交流は，地域を越えて，瞬時にできるが，この二つの知の融合には，実際の人と人の交流と時間を必要とする．そこで，博物館における人の問題，現実的には学芸員のあり方を一方では考え，また，大学人と地域住民の交流のあり方にも考えを及ぼした．神奈川大学日本常民文化研究所と只見町は具体的な提携として，只見常民大学を発足させ，2005年3月27日に第一回を開催した（中村政則「只見川電源開発と只見町－高度経済成長が只見にもたらしたものの－」）．

実際，神奈川大学における大学博物館も只見町における地域博物館も現状は資料を有しながらも，その萌芽状態と言ってよく，このCOEプログラムにおけるさまざまな試行を経て，ひとつの実効のあるシステムづくりを提示できればと考えている．その実験の場として，2006年秋に，「(仮題) 職人巻物と職人の世界－山村の生業と生活構造－」展示を神奈川大学常民参考室および地元の只見町・金山町・福島県立博物館で開催する企画を立てている（図1）．

インターネット博物館も含め，この展示の試みが「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の一環として，ローカルな只見地域を軸足としながらも，日本というナショナルな，またグローバルな視点から民具を捉え，その意味付けを考える契機となる，そのような情報発信の場になるシステムの開発を目指して行きたいと考える．

## 注および参考文献

- (1) 『ユニバーシティ・ミュージアムの設置について（報告）』文部省学術審議会学術情報資料分科学術資料部会 1996.1.18, なお, 日本学術振興会では, 人文・社会科学振興プロジェクトの一環として「日本の文化政策とミュージアムの未来」（代表＝木下直之東京大学教授）を2004年秋にスタートさせ, また, 日本学術会議では今日まで, 第5常置委員会「公文書館専門職員養成体制の整備について」1988.5, 総会議決「公文書館の拡充と公文書等の保存利用体制の確立について」1991.5, 第四部人類学・民族学研究連絡委員会「古人骨研究体制の整備について」1997.6, 学術基盤情報常置委員会「行政改革と各種施設等独立行政法人化の中での学術資料・標本の管理・保存専門職員の確保と養成制度の確立について」2002.3, 第一部文化人類学・民俗学研究連絡委員会「博物館・資料館等において調査・研究・教育活動に携わる研究者の研究環境整備について」2002.10, 第二部刑事法学研究連絡委員会「刑事事件判決原本及び一件記録等の保存及び公開の要望について」2003.5, などの報告・要望書を出し, 2006年3月より, 学術・芸術資料保全体制委員会を発足させ, 大学博物館の問題も検討対象にするという。
- (2) フランスの学芸員教育については, ジュヌヴィエーヴ・ガロ氏（パリ国立文化遺産研究所校長）が第1回神奈川大学COE国際シンポジウム席上で発表した（2005.11.26, 報告書は2006年6月刊行予定）。また, 井上敏「博物館の人材養成制度について－日仏の学芸職の比較から－」『研究紀要』2 日本ミュージアム・マネージメント学会 1998などが参考になる。高度専門職学芸員の必要性については, 竹内順一「学芸員養成の問題－スペシャリストの必要性－」『文化庁月報』399 2001.12など参照のこと。
- (3) 2005年9月23日, John E. Simmons氏にカンザス大学自然史博物館において聞き。同行者, William Lindsey（COE調査研究協力者・カンザス大学準教授）, 高橋真理子氏（通訳）。その後, 博物館学コースの4人の講座受講生からも話を聞く。
- (4) 2005年9月26日, Linda Newberry氏にハーバード大学エクステンション・センターにて聞き。同行者同上。
- (5) 参考に神奈川大学の学芸員課程のカリキュラムを示しておく（図2）。日本では, 学芸員資格は博物館法により, 大学で所定の単位を取得するか, 文部科学省の行う検定試験に合格するかにより認定される。学芸員課程を開講している大学は, 4年制大学279校（国立59 公立18 私立202）, 短期大学29校（公立1 私立28）である。（2005.4.1.現在 文部科学省生涯学習政策局社会教育課調べ）
- (6) 柳田國男「郷土誌編纂者の用意」『定本 柳田國男集』25巻所収, 初出は『郷土研究』2-7, 1914.9。
- (7) 只見町史編さんの周辺を, 文化財係長の新国勇氏が河北新報のコラム『計数管』に8回連載していて, 参考になる。「－略－自治体史が完成しても, すぐにこれといった効果がでるものではない。しかし, ムラおこし, 地域再発見, 観光案内, 生涯学習, 総合的な学習で, まっさきに必要なのは自治体史である。文化で腹はふくれないと言われるが, 衣食足りて残るのは文化である。この知的財産に自治体がいかに投資するかで, その市町村の将来が決まってくるように思う。」（『町の文化財目録』2001.5.31）と編さんの基本的姿勢を述べている。他の題目をあげておくと, 「タニばあちゃんと昔話」（2001.4.19）, 「民具整理と老人パワー」（以下同年, 5.10）, 「町史でムラおこし」（6.21）, 「カモシカ騒動」（7.12）, 「なくしてわかる自然かな」（8.2）, 「自然の楽しみ方」（8.23）, 「子どもと自然」（9.13）
- (8) 梅棹忠夫「情報と文明」『梅棹忠夫著作集』14 1991。
- (9) 佐野賢治「地域社会と民俗学－郷土研究と総合的学習－」『民俗学論叢』18 2003.3。
- (10) 佐々木長生「古老たちの民具整理－福島県南会津郡只見町の事例－」『民具研究』102 1993.3。
- (11) 日本学術会議学術基盤情報常置委員会報告『学術資料の管理・保存・活用体制の確立および専門職員の確保とその養成体制の整備について』2003.6.24では, 「日本の社会は多様な価値観に根ざした多彩な地域文化によって成り立ってきたものである。その基には各地域にあったそれぞれの地域コミュニティの活性化を図ることが日本社会全体の活性化につながる。その核としての地域の文化拠点作りが緊急に求められる所以である。その効果が目に見える形ですぐに現れることは必ずしも期待できないが, 長期的な視野に立つならば地域の社

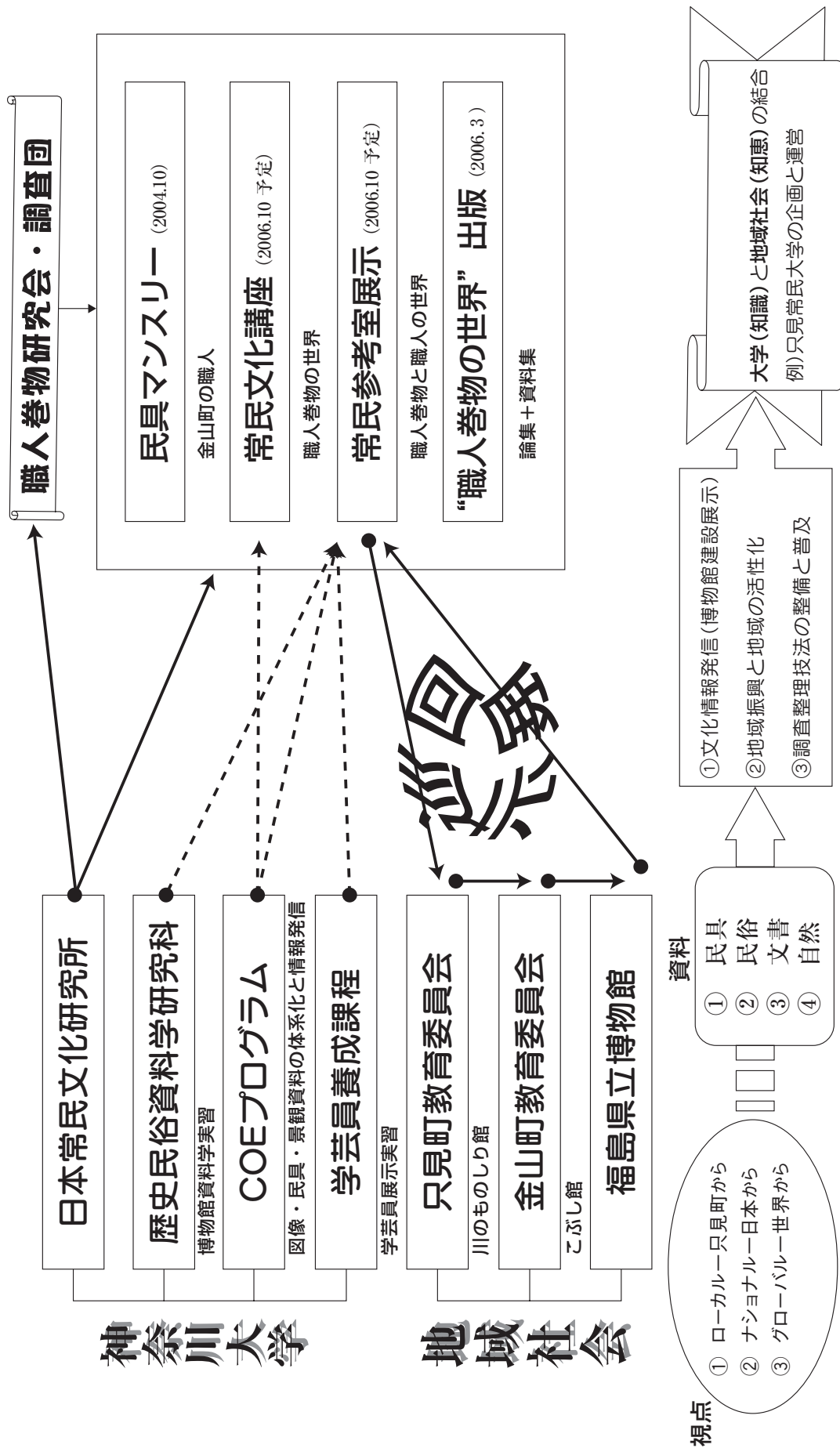


図1 大学と地域社会の連携



会と文化に根ざした多様な価値観が醸成され、それを基にして地域コミュニティの再活性化が可能になる。地域コミュニティが自らの在り方に自信と誇りをもつこと、これが再活性化の鍵である。図書館・公文書館・博物館・公民館が一体となって文化拠点作りに励むことがその第一歩となる。文化拠点作りの核になるのが地域の史資料・標本資料である。」(6頁)と地域資料とその公開展示の拠点となる文化施設の意義を強調している。

## 学芸員に関する科目(2006年度入学者から適用)

省令科目			1年次		2年次		3年次		4年次		
科目名	単位		授業科目	単位	授業科目	単位	授業科目	単位	授業科目	単位	
必修科目・ 選択必修科目	博物館概論	2			博物館学Ⅰ	○2	博物館学Ⅱ	○2			16
	博物館経営論	1					博物館学Ⅲ	○2			
	博物館資料論	2									
	博物館情報論	1									
	教育学概論	1	※教育原論Ⅰ	○2							
生涯学習概論	1	#生涯学習論Ⅰ	×2								
		#生涯学習論Ⅱ	×2								
視聴覚教育 メディア論	1			※メディア・リテラシー	○2						
博物館実習	3					博物館実習Ⅰ (古文書実習)	×2	博物館実習Ⅱ	○2		
選択科目	文化史	日本史Ⅰ	2	建築史A	2						8 (2系列以上)
		日本史Ⅱ	2	日本芸能論Ⅰ	2						
		日本文化史Ⅰ	2	日本芸能論Ⅱ	2						
		日本文化史Ⅱ	2								
	美術史	芸術論Ⅱ(美術)	2			建築史C	2				
		芸術論Ⅱ(美術)	2								
	考古学	考古学Ⅰ	2								
		考古学Ⅱ	2								
	民俗学	文化人類学Ⅰ	2								
		文化人類学Ⅱ	2								
		民俗学Ⅰ	2								
		民俗学Ⅱ	2								
地学	2					地学Ⅰ	2				
	2					地学Ⅱ	2				

## 〔備考〕

- 印は必修科目、×印は選択必修科目を示す。※印は教職に関する科目と共通の授業科目、#印は社会教育に関する科目と共通の授業科目であることを示す。
- 「博物館学Ⅰ」は博物館概論を含む。「博物館学Ⅱ」は博物館経営論、博物館情報論を含む。「博物館学Ⅲ」は博物館資料論を含む。
- 登録は原則として2年次に行う。
- 1年次生が「教育原論Ⅰ」及び「生涯学習論Ⅰ・Ⅱ」を履修するには、予め仮登録が必要である。未登録者は単位が認定されないので注意すること。
- 2年次は3・4年次に配当されている必修科目及び選択必修科目は履修できない。
- 「博物館実習Ⅱ」は、3年次までの必修科目及び選択必修科目を修得済みの者でなければ履修できない。
- 学芸員資格取得の要件=必修科目12単位、選択必修科目4単位、選択科目から2系列以上にわたって8単位以上、合計24単位以上を修得すること。

図2 神奈川大学学芸員課程のカリキュラム